

学校だより 3月号



東深沢

令和8年2月27日
みしまの森学舎
世田谷区立東深沢小学校
校長 奥長 英樹



empathy エンパシー

校長 奥長 英樹

3月を迎えます。学校公開、また保護者会と、年度末のお忙しい中、学校へお越しいただき、ありがとうございました。次年度へと進学・進級する子どもたち。年度末の3月の学びを、しっかりと支えていきたいと思ひます。

さて、『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という本をご存じでしょうか。その一節に、次のようにあります。

・・・

期末試験の最初の問題が『empathy エンパシーとは何か』だった。

「なんて答えを書いた？」

「自分で誰かの靴を履いてみることに、って書いた。」

自分で誰かの靴を履いてみることに、というのは英語の定型表現であり、他人の立場に立ってみるという意味だ。日本語にすれば、empathy は『共感』、『感情移入』または『自己移入』と訳されている言葉だが、確かに、誰かの靴を履いてみるというのは、すこぶる的確な表現だ。

「EU 離脱や、テロリズムの問題や、世界中で起きているいろんな混乱を僕らが乗り越えていくには、自分とは違う立場の人々や、自分と違う意見を持つ人々の気持ちを想像してみることが大事なんだから。つまり、他人の靴を履いてみることに。これからは『エンパシーの時代』、って先生がホワイトボードにでっかく書いたから、これは試験に出るなってピンと来た。」

・・・

本の中では、このエンパシーの意味についても以下のように書かれていました。

・・・

エンパシーと混同されがちな言葉にシンパシーがある。

オックスフォード英英辞典のサイトによれば、

シンパシー(sympathy)は「1. 誰かをかわいそうだと思う感情、誰かの問題を理解して気にかけていることを示すこと」「2. ある考え、理念、組織などへの指示や同意を示す行為」「3. 同じような意見や関心をもっている人々との友情や理解」と書かれている。一方、エンパシー(empathy)は、「他人の感情や経験などを理解する能力」とシンプルに書かれている。つまり、シンパシーの方は「感情や行為や理解」なのだが、エンパシーの方は「能力」なのである。前者は普通に同情したり、共感したりすることのようだが、後者はどうもそうではなさそうである。

ケンブリッジ英英辞典のサイトに行くと、エンパシーの意味は「自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することによって誰かの感情や経験を分かち合う能力」と書かれている。

つまり、シンパシーの方はかわいそうな立場の人や問題を抱えた人、自分と似たような意見をもっている人々に対して人間が抱く感情のことだから、自分で努力をしなくとも自然に出てくる。だが、エンパシーは違う。自分と違う理念や信念を持つ人や、別にかわいそうとは思えない立場の人々が何を考えているのだろうと想像する力のことだ。シンパシーは感情的状態、エンパシーは知的作業とも言えるかもしれない。

・・・

エンパシーという資質・能力を活用し育てることは、学校教育において大変重要なことと考えられます。SNS が全盛の時代にあって、現実の世界にも、ネットの世界にも、欠くことのできない資質・能力といえます。しかしながら、子どもたちは日々学校という環境でこの課題に直面しています。つまづいたり、のりこえたりしながら、歩みを進めています。私たち大人自身も、同様に、エンパシーを働かせ、学び続けることが必要だと思ひます。

この1年の歩みを大切に、互いの経験を理解しつつ、年度のしめくりへと向かっていきたいと思ひます。